



Title	フードツーリズムにおける物語経験に関する研究：ダイアログに着目したナラティブ・アプローチによる考察 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	青木, 洋高
Citation	北海道大学. 博士(観光学) 甲第15615号
Issue Date	2023-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90897
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yohkoh_AOKI_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：青 木 洋 高

	主査	教授	西	川	克	之
審査委員	副査	教授	山	村	高	淑
	副査	准教授	天	田	顕	徳

学位論文題名

フードツーリズムにおける物語経験に関する研究

—ダイアログに着目したナラティブ・アプローチによる考察—

本論文は、食に関わるツーリズムの先行研究を、フードツーリズム研究分野とガストロノミーツーリズム研究分野の詳細なレビューを踏まえ整理したうえで、そこにツーリズムにおける場所への物語性の付与、場所における物語の消費を先駆的に扱ってきたコンテンツツーリズムの観点ならびに、言語学やコミュニケーション論を中心に議論されてきた「ナラティブ論」「ダイアログ（対話）論」の観点を加えることで、これまでのツーリズム研究にはない独自の視座から具体的事例に沿って実証的に論じたものである。情報はもとより観光行動や観光地の選択に多大な影響を与え、信頼できる正しい情報なくして、安心して楽しい観光は成立しないが、しかしまた適切十分な情報が常に豊かな観光経験を保証するものでは決してない。単なる情報がストーリーとしてまとめられ、さらにそれがホスト・ゲストを含む諸アクター間の相互作用を通して、観光地で語られ共有されるナラティブに転化することによって、観光者を惹きつける物語経験を生み出すことになる。本論文では、食に関わる実践が中心としてあるフードツーリズムにおいても、土地の名産品を飲食すること自体は消費経験に留まる傾向が強く、観光のあり方がますます多様化する現代的状況においては、食に関わる潜在的な物語へのアクセスに観光者を導いていくことこそが、地域の観光振興に新たな可能性をもたらす契機になると主張される。

本論文の主な学術的貢献は以下のとおりである。まず、観光研究では従来応用されてこなかったナラティブ・アプローチを、既往研究を精査したうえで、具体的事例に適用している点は、方法論上の新規性として高く評価できる。すなわち、SCAT分析や、会話分析のみならず、計量テキスト分析などの統計的手法も適宜参照しながら、ナラティブ・アプローチを具体的な観光現象の分析手法として

確立したことは大きな学術的貢献である。また、本論文で扱われる3つの事例においては、長期にわたる現地調査から得られた一次資料が示されており、資料的価値も極めて高い。そうした事例の選択においては、客観的な妥当性の検討など、議論の進め方が適度に慎重であり、それが学術論文としての信頼性を高めているとも認められる。総じて、ナラティブ・アプローチ、モノログからダイアログへの転換、パフォーマンスの視点にもとづいたオーセンティシティの変容といった複数の論点を巧みに組み合わせて緻密に独自の理論枠組みを構築しようとする努力と、丹念にフィールドワークを実践して客観的データを積み上げて行こうとする真摯な姿勢が高く評価される論文である。

しかしながら一方で、本論文には以下のようないくつかの課題も残されている。まず、現代において観光者は消費者であることを避けられないとすれば、本論文の「消費」に関わる議論はいささか紋切り型で深みを欠いているという印象を免れない。たとえば、ダイアログの段階に達するまでもなく、多様化した個々の消費のモノログ的なストーリーにも、より積極的な意義を見出すことはできないかという疑問が残る。さらにまた、上述のとおり事例の選択に際しての客観的妥当性が主張されているものの、果たしてそれぞれ最善の選択であったかどうかには議論の余地があると同時に、事例分析を扱った論述部分にいささかの冗長性が否めない。加えて、援用される理論枠組みと扱われる事例の間に若干の齟齬が感じられる。具体的には、ポリフォニック的要素を備えた新たな観光経験の創出に、ダイアログに加わる観光者の存在が不可欠のはずであり、また「ストーリーの再構築」はダイナミックなプロセスのはずだが、ある事例では観光者の感想ノートの記述という文字化されたスタティックな資料が扱われ、また別な事例においては、そもそも観光者の生の声や感想が分析に含まれていない。

しかしながら、こうした不足や課題は本論文の独自性の裏返しであるとも考えられる。ここで提示された「フードツーリズムにおける物語経験の展開プロセスモデル」は特に独自性の高いものであり、今後、本論文における検証結果を踏まえ、特に「ストーリー」「ナラティブ」「ダイアログ」といった主要概念の定義を見直しつつ、この仮説的モデルをさらに洗練化して、得られた知見をフードツーリズム以外のツーリズム形態に適応可能にしていくことが強く期待される。

こうして本論文は、質・量両面において極めて詳細で豊富な一次資料を収集した上で、精緻な分析による論理的な説得力と高度な学術的貢献を備えた結果を提示しており、博士学位論文に求められる水準を十分に満たしていると認められる。したがって審査委員会は博士（観光学）学位の授与に値するものとして、本論文を合格と判断した。